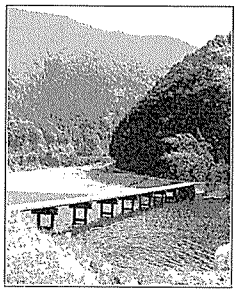
■特集／橋と景観
－各　　論－
報　　文



失われた風景を求めて

内藤　廣*

文化というのは，科学技術から芸術まで，一見まったく関連のない分野でも，時を経てみるとその時代の意識というものに色濃く染まっていることが多いようです。だれもがその時代の生活者なのですから，その基底は大同小異で，知らずのうちに時代の見えない閉ざされた領域のなかに居るのかもしれません。いわんや土木と建築は，文化のなかでも非常に近い位置に居るわけですから，造られる仕組みが片や公共の枠組み，片や民間の枠組みと別れるにしても，その底には通底する時代感覚というものが在るのだと思います。

建築や都市の分野では，景観に対する議論は周期的に現われます。建築を単体で考えるか，都市であれ自然であれその周辺といかにして一体となるかを中心に考えるかは，大きな違いです。これらの間で建築のスタンスは揺れ動き続けています。景観論議は，建築においては周期的に現われてきます。建築がひとり歩きし，唯我独尊のエゴイスティックな傾向が強くなれば，景観から遠くなり，その熱が冷めると周囲の環境や景観の話が浮上して来るといった具合です。

1.　建築の現在

建築の側から土木の分野がどう見えるかを論ずる前に，まず，建築の置かれている現況を述べねばならないでしょう。

全般的に建築は，現在混沌とした状況にあります。80年代のバブル経済は，建築を造っていく生産のシステムに根本から打撃を与えたように思います。発注量の急激な増加は，建築を造るうえでの下請けを，幾重にも重ねることで処理されました。多いときは五次下請けまであったそうです。発注先から現場まで，幾重にも作られた監理の網は，仕事量がふえるにつれ鼠算的にふくらんでいきました。つまり，中間で監理する人の膨大な増加です。こうしたことの災禍は，見た目が派手なデザインの世界よりも，その生産のシステムに色濃く残ったようです。たとえば，ゼネコンの発注システム，国際化，熟練労働者が長年カバーしてきた技術，素材，構法，それらすべての枠組みが見直しを迫られています。

80年代，建築のデザインの傾向には，ある顕著な特徴があります。いわゆるポストモダニズムと呼ばれるものです。機能や造られる仕組みと，建築の表現形態を切り離すことによって，それまでの生硬な建築の価値を覆そうというものです。この間，建築の表面は人目を驚かすオブジェのようになったり，派手な衣装を着たような色彩やグラフィックで埋め尽くされるのが常でした。つまり，造られ方の問題，建築の生産の問題に目をつむり，その疲弊を看過してきたのだといえます。

この時期，建築は，形の問題，すなわち形態のもたらす効果にのみ目を奪われていたのだと思います。どうしたら他の建物と異なることができるのかという自己主張が，繰り返し行われてきました。異形であればあるほど，目立てば目立つほどその価値が高い，という風潮がありました。人の欲するものを作る，建築を人間に対して開かれたものに，という題目はそれ自体間違ったものではなかったかも知れません。ともすれば，建築を造る側の理論からしか見ていなかった状況に，当初それは痛烈な批判となりました。しかし問題は，そうした在り方は通俗に堕しやすい，ということです。建築は，耐久消費財的な，きわめて短期的な価値に絡め取られていた，

* Hiroshi NAITOH
内藤廣建築設計事務所

といっても良いでしょう。

デザインの主義主張はすぐに変えることができます。しかし，物をベーシックなところで生産するシステムは，一朝一夕では変わりません。ダメージは，取返しのつかないところにまで来ているように見えます。今後十年，建築を造っていく仕組みの変化は，その結果として現われるデザインを，根底の所でじわじわと変わっていくでしょう。20 世紀初頭，モダニズムが誕生した時のような，大きな変革が近いのではないか，と思っています。建築は，次の時代の新しい価値を模索している時期なのです。

おそらく，90 年代後半から 21 世紀初頭の建築の主要なテーマは，「効果の問題」から，いかにして建物が造られるかという「仕組みの問題」へと移っていくでしょう。それをより良い形，より美しい形で提案しえたものが，次の時代の基調となっていくのではないかと思います。

2. 建築の側から見えること

こうした建築の現状から土木，とりわけ橋のデザインの一般的な趨勢を見ると，最近二つの方向が見られるような気がします。どちらも，より早く世の中の動きを反映する建築の状況とは，若干のズレがあるようです。

今，地方のどの町に行っても，橋の擬装に妙にこったデザインをしつらえたものが数多く見受けられます。その町の歴史や風物をなんらかの形にあしらった欄干や手摺り，彫刻，いかにもといった照明，その多くは安直な思いつきで造られたものがほとんどです。なかにはトンネルの入り口周辺の擁壁に，トンネルの穴を口に見立てて絵を描いたり，その地の民家の土塀のようなデザインであしらったものや，ありとあらゆる物が出現しつつあります。

これらすべては，建築が 80 年代に侵したと同じ愚を繰り返すものです。建築はいかに度が外れようが醜かろうが，個の問題として終わりますが，こうしたものは大小を問わずその地域全体の文化を誤つ物といえるのではないかと思います。そこそこ有名な彫刻家や絵描きが集まって，大がかりな展示会をやった時のこと，ある慧眼の士がそれらを一渡り見て「みんな昨日思いついたようなアイデアをたいそうに作品と呼んでいる」と評しました。形を現実の物に表現することは，存外恐ろしいものです。見る人が見れば，その造った当人の心底のすべてが見えてしまうからです。ましてやそれが公共の場に出る場合には，よほど慎重に，やるならば百年後に真を問う覚悟で当たるようでなければならないのではないでしょうか。受けを狙った安直なデザインは，失笑ものです。

こうしたものを見ていると，それまで他に対して頑ななまでに媚を売ることを拒んで自らの信念を貫いてきた剛直の士が，突然，辺りかまわず媚態を呈している，の感があります。建築のことを棚にあげて偉そうなことも言えませんが，本来土木の分野は国家百年の計をもってなされるもの，という本道を忘れてはならないのではないでしょうか。先に述べたようなものが現われはじめたのは，近代的な技術の集積の延長では，すべての人を納得させられるような「美しさ」は立ち現われ得ない，と言うような諦念にも似た感情が，発注者側にも，提案をする側にもあるからではないでしょうか。それが，当座を取り繕うに窮して，媚を売ったような擬装に走らせているのではないかと思います。

もうひとつは，これとは正反対の方向，建築出身のカルトラバに見られるような構造表現主義の台頭です。カルトラバは，構築物の構造を際立たせるのに巧みです。しかし，それを表現するために，かなりの犠牲を払っているように見えます。純粋に力を素直に表現するというのではなく，構築物を象徴とするに足る前提をまず設定し，それが際立つように架構を組み上げていきます。立てた前提と現状との矛盾を，構造表現でつなぎあわせるやり方は，実は不自然なことなのではないでしょうか。この辺りに疑問が残ります。久しく忘れ去られていた架構の美しさを再認識するのには賛成ですが，土木構造物が，その場所の理屈にあった象徴となるには，かなりな推敲が不可欠なのではないかと思います。まだ日の浅いこの傾向が，これから我が国にどう反映してくるのかはわかりませんが，すぐに海外の後を追う我が国で，しばらくすると今度はどこに行ってもカルトラバのようなものばかりが目に入ってくるようでは，これもまたつらいものがあります。

もとより建築もそうあるべきなのでしょうが，ことに土木構造物は，今，眼前にいる人だけを満足するのでは足りません。時代が変わり，いく世代を経ても，その価値が減ずるものであってはならないはずです。変わりやすい流行や，その時の価値にのみとらわれていては，我らが国は，いつまでたっても外に向かって誇れるような景観を生み出すことはできないのではないか，と思います。

3. 「素　　形」

自分の建物を説明する考え方として，「素形」という言葉をしばしば使います。文化人類学の祖型という言葉からもじってつくった造語です。こういう特殊な言葉を作ったのは，当てはまる適当な言葉や概念が差し当って見つからなかったからです。「素形」という言葉は，目標とする理想として提示したものです。

現実の建築は，ふたつの側面から構成されます。ひとつは，デザインや設計といった意識によって形を与えられる建築，もうひとつは木や鉄やコンクリートといった物質としての建築です。このふたつが縦横の糸のように編まれて，現実の建物になります。先に述べた80年代は，この意識の部分が突出した結果もたらされたものです。

これをもう一度，バランスの取れたものにしたいと考えています。意識によって歪められた現況を，物と意識のバランスの取れた姿に戻していこうというわけです。我々の意識の奥底にある建築の原型のようなものを「素形」と呼んで，それに向けて造っていこうというわけです。物の至極当たり前の在り方が，ある美しさを顕現しているようなもの，そういう建築の在り方に向けて，日々試行錯誤を繰り返しています。

「素形」は，建築に与えられた与件，コストや機能，技術的制約，土地の気候風土，そうした諸々の条件の均衡点，無駄のまったく無い最適解のなかに自然と現われてくるものなのではないか，と考えています。

4. 時の復権

「素形」にはいかなる方法をもってアクセスすればよのでしょうか。私は，今まで土木が取ってきたスタンスを中心に据えるのがよいのではないかと思っています。つまり，長期的な「時間」を視野に入れて物を造っていく，という方法です。

非常に短い時間しか存在しなくてよいものであれば，物の在り方の解は無数にあります。ところが，時間をずっと伸ばしていって，百年を超えても存在を確信し得る構築の仕方を問えば，その解は極めて限られてくるのではないでしょうか。さらに千年とか時間のオーダーを伸ばせば，今の我々には，ひとつか二つの方法しか残されないはずです。つまり，建築にせよ何にせよ，形態は「時間」に色濃く支配されているのです。我々，今の技術をもってすれば，三次元の空間にはいかなる形も可能だと思い上がっています。それゆえ，建築はさまざまな擬態を呈し，多様化してきたのです。「時の不在が，多様化を導き寄せたのだ」ということもできます。

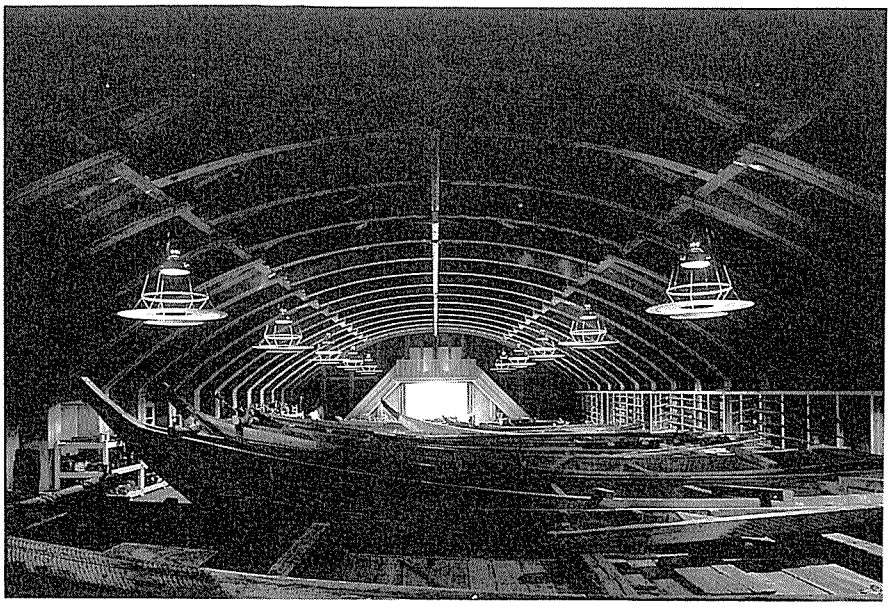
先に述べた建築を成立させる幾つかの条件の均衡点は，実は，設計者のとらえ方によって随分と範囲が広いのです。「時間」のオーダーを入れることにより，さまざまなことが整理されていくのではないでしょうか。設定する時間を伸ばしていけば，均衡点は自ずと絞られてきます。そのなかで，すべての建築の原型である「素形」も見えてくるのではないか，と思っています。

5. 海の博物館

この考え方は，「海の博物館」を設計する中で，自然と出来上がってきたものです。さして大きな建物ではないのですが，設計にかかってから出来上がるまでに七年余りがかかりました。悪戦苦闘の連続でした。

海の博物館は，二十数年前，三重県の鳥羽市内に，伊勢志摩地方の漁師の漁労用具を収集展示する目的で建てられた博物館です。手狭になったのと建物が老朽化したので，郊外に移転することになり，設計に着手しました。

いまとなれば，至極まともなことなのですが，この仕事はその与条件が，当時の状況とはまったく正反対の非常に特殊なものでした。建て主の要求は明解です。可能なかぎりのローコストと可能なかぎりの耐久性，この二点です。さまざまな試行錯誤の末，建物をできるかぎり単純な形にすること，無理なく敷地にはめこむこと，必



写真−1　海の博物館（内観）

要であれば，古い技術であれ新しい技術であれ，何でも使っていくこと，そうした原則を貫く以外にこの二つの要望に応える道はないということがわかってきました。これらの均衡点を探す中で，「素形」という考えに至ったわけです。

6 800 点の重要民俗文化財を収蔵する全体の約半分を占める収蔵庫は，PC のポストテンション組立て構法，一般の人たちが来館する展示棟は，大断面集成材を使った複合立体トラスで架構を組み上げています。

6. ピアノ・牛深連絡橋

このスタンスは，その後の仕事でも変わっていません。

今，九州天草の南端の牛深で，レンゾ・ピアノが設計した牛深連絡橋のたもとの所に，博物館と物産センターが一体になったような建物を計画しています。全体としては魚市場のような活気のある空間を造ることを目標としています。牛深は，漁船 1 500 隻を抱える九州でも有数の漁港です。ピアノの橋は，港の上を大きく弧を描いて，町の中心に近いところに下りてきます。飛翔する橋のランディングの成否に，このセンターは重要な役割を演じることになります。

ここでまず考えたのは，橋の巨大さとヒューマンスケール，橋と建築の共存をどう作り出すかということです。ピアノ自身も，橋の設計に当たって，橋自体にいかにヒューマンなスケールを与えるかに腐心したようで，そのひとつが風避けのフィンや構造にも反映されています。それでもやはり近いところでは，巨大さは拭えません。橋の土木的なスケールを，デザイン的にも齟齬なく，いかにしてこのセンターにつなげていくかが問題でした。橋を背骨，このセンターを肋骨に見立てることにしました。ピアノの橋のウォークウェイに付けられた風避けのフィンは，背骨のようにも見えます。これに対して，センターは垂直方向に軸性を取り，横に広がっていくイメージを作ることが，もっともバランスが良い在り方なのではないかと考えました。

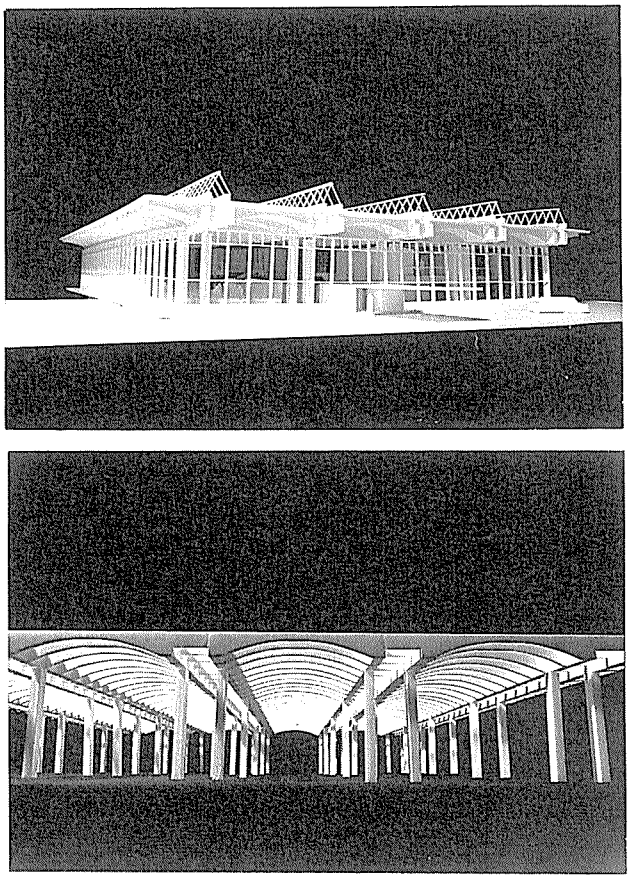
ここでも素形とういことを念頭において設計を進めています。市場のような自由で活気のある空間を造るための軽やかな架構，塩害に対しての十分な配慮，台風時の風雨に対する解決など，そうしたものの均衡点を探りながら，時間のオーダーをできるかぎり未来に向けて伸ばしていくことを考えています。ここで提案した架構や形は，この地の条件から導き出されたものです。これがある美しさや合理性を備え，ここに暮らす人たちに受け入れられ，この方式が町の基本的な言葉となって，大小種別を問わず，今後造られていく建物に汎用されていくことになれば，と思っています。

7. 十日町情報館

新潟県の十日町という，日本でも有数の豪雪地で，町の中心施設となる図書館の設計を進めています。市街地積雪の記録が 4.5 m，想定の積雪荷重が 1 m^2 当たり 1 t というところです。図書館といっても，私の提案した計画は，人がしじゅう溢れているような場をいかにして造り上げるか，という点に絞られています。本を読んだり借りたりという図書館の機能が中心になってはいますが，要は人が集まらなければ何にもなりません。老若男女，多くの人が集まり群れる場を提供することこそ公共の建物の役割なのではないか，建築はそれを可能にするための装置，その地の気候に対して長い時間性能を保持し得るシェルターでありさえすればよいのではないか，と考えました。こうしたスタンスも当然，先に述べた素形の考え方に，自然と引き寄せられています。

今まで，落雪型，融雪型等，さまざまな方法が試みられてきましたが，大量の落ちた雪の処理がうまくいかなかったり，ランニングコストがかかりすぎたりと，これといった方法がまだ見つかっていませんでした。この雪に対する解決方法が，建物の基本的な言葉，将来この町の建物の基本的な言葉になることを考えています。

いま提案しているのは，堆雪型で，雪を屋根の上に貯



写真−2　十日町情報館（模型）

めたままにしておく方法です。雪を支える単純な矩形の屋根を提案しました。当然，堅固で高性能の架構が必要ですから，屋根の部分の架構をPCのポストテンション組立て構法で構成することを考えています。大きな屋根ですから，スリット状のトップライトを入れ，この部分から内部に光を入れるようにしています。雪が屋根の上に堆積していくときの景観なども想像し，それがデザイン的にも生きるようにしながら計画を進めています。

8. 上越の橋

今年のはじめ，同じ新潟県の上越市に掛かる橋の指名設計競技に参加しました。

ここでやろうとしたことは，橋を旧来の論理に戻すことでした。山や川といった地勢的要因は，長い間その他の歴史を育んできました。軍事的な意味，経済的な意味，さまざまな人の営みの舞台装置です。この川に，新市街地と旧市街地をつなぐ橋を掛けるわけです。これはそれまで阻まれていた両岸の関係や意味を百八十度変えることなのだと考えました。道路の延長線上に考えられてきた従来の橋は，ともすれば「通過する」，「貫く」，という視点に立ちすぎたきらいがあります。その足元には，その地の人たちの生活があり，その地の特性から生じる論理があります。それは今までのこと，過去となる宿命を持った現況，ということもできないわけではありませんが，これを無視するのではなく，うまくこの過去の時間とこれから計画によって生まれる未来の時間を接続することはできないものか，と考えました。

「通過する」というのは，建築で言う機能の問題です。当然満たされるべき与条件としてあるわけですが，それは空間的な条件を満たすに留まります。そこに時間の文脈を導き入れるには，些末な擬装にとらわれるのではなく橋全体の構想が，その地の地霊，つまりゲニウスロキといかに接続されるかが重要です。地勢的要因から生まれた歴史を参照し，その場所の持つ特性が，この橋が出来ることによって，逆に際立ち，蘇生する，というようなことを意識しました。かつて上杉謙信が居城した山が，象徴的に見えるような軸性を作り，それと直行する川，堤との関係が明解になるようにしました。構造体としての橋は，こうした目的が達成されるための装置として，デザイン的に突出すること無く，コンクリートシェルを組み合わせた無理の無い形で提案しました。専門分野外のことなので，至らない提案でしたが，私にとってはたいへんおもしろい挑戦でした。

9. 希望と可能性の提示へ

人はときたま思いもかけないときに，自分のやっていることの小ささを思い知るものです。ある休暇を熱帯の島で過ごしたときのこと，真っ青な空と海，真っ白な砂浜，忙殺されている仕事も忘れて，ひがな一日椰子の木陰で昼寝をして過ごしていました。椰子は海辺の強い風を受け、天空には雲ひとつなく，昼間なのに真っ青な空に白い月がでています。ふと見上げると，椰子の木の高さは30 mほどもあります。それなのに幹の直径は根元の一番太いところで40 cmぐらいしかありません。その天辺に葉を固まりのように付けて強風を受けながら，木はさしたるしなりも見せず易々と立っています。これをスチールでやったらどれほどの基礎とどれほどのメンバーがいるのだろう，などと考えてしまいました。人間の構築技術は，自然の進化が生んだ知恵には，まだ及ぶべくもないことを実感しました。

一方，昼間の天球に白い切り紙細工のように貼りついた月は，また別のことを想起させました。1970年，アポロが月面着陸するまで，あれはだれがどう論じようと，天球に貼りついた紙のようなものだったはずです。それを実際，我々人間の経験則の中に引き入れたのは，紛れもなく1970年のあの一瞬だったのだ，ということを思い出しました。あの時，たしかに世界は違って見えたのです。それまで天球に貼りついていたものが，突然，天体として立体的に意識された記憶があります。空に貼りついたペラペラの白い月を見ながら，あそこまでの距離を実際に行く技術のすごさとはいかなるものなのだろうと，今度は逆に人間の技術の持つ可能性と凄さ

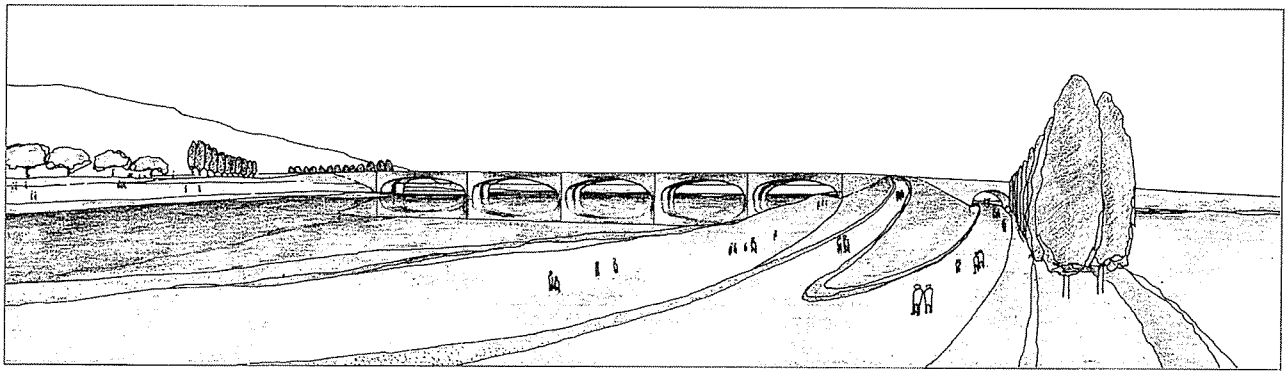


図-1 上越市の橋のコンペ提出案

に，改めてある感慨を抱きました。

我々は常にこの二つの感情の狭間に居るような気がします。自然に遠く及ばないと思ったり，知はあまねく世界を席巻すると思ったり，いわば分裂病のような状態に苛まされています。思えば，二十世紀後半の我々は，文明の生み出す技術を中心に狂喜したり絶望したりすることの連続でした。核戦争，月面着陸，環境問題，バイオテクノロジー，等あげれば切りがありません。一喜一憂に疲れたといのうが素直なところではないでしょうか。この極端な揺さ振りに疲れて，いま誰もが心の奥深いところに，ある種の諦めの感情を持っているのではないでしょうか。美しいもの，真に人間と自然の生理に合った心地好いもの，長い時間を経ても変わらずに光り輝き続けるもの，そうしたものが存在し得るということを誰も夢想だにしていないような気がします。

土木や建築といった日常世界の基底を司る分野こそ，こうした疲弊を打ち破ることができるのではないかと考えています。物を造るごく普通の筋道の延長にも，突き詰めていけば，美しさが立ち現われ得るという「希望」と「可能性」を提示することが求められているのではないか，と思います。

【1994年8月24日受付】